

第 19 回風景デザインサロン「地域自治と風景」報告

平成 22 年 12 月 15 日、第 19 回風景デザインサロン「地域自治と風景」を、由布院にて開催いたしました。伊藤洋典氏の基調講演の後、パネルディスカッションでは会場を交えながら活発な議論が行われました。本報告では、事前説明から、基調講演、パネルディスカッションの要点をご報告いたします。

1) 概要

講師：伊藤洋典氏 / 熊本大学法学部教授

日時：12 月 15 日（水）18:00 ~ 20:00 （第 0 部：14:00 ~ 15:00）

会場：由布院温泉観光総合事務所会議室

参加者：26 人（講師含む）

プログラム：14:00-15:00 事前説明「由布院に関する基礎知識」

/ 高尾忠志氏（九州大学大学院特任）

18:00-18:10 趣旨説明「地域の風景を繕う」 / 高尾忠志氏

18:10-18:50 基調講演「『地域』とは何か」 / 伊藤洋典氏

19:00-20:00 パネルディスカッション「地域自治と風景」

パネリスト / 伊藤洋典氏、小林華弥子（由布市議会議員）、高尾忠志氏

コーディネータ：田中尚人氏（熊本大学政策創造研究教育センター准教授）

2) 趣旨説明 「地域の風景を繕う」要旨

私たちのまわりに広がる風景は、私たちの暮らす社会を成立させるシステムのなかで、自ずから崩壊していきます。私たちは、ローカリティを失い、均質化していく風景をして、それをどのように繕い続ければよいのでしょうか。こうした問い合わせに対して、本サロンでは行政学からのアプローチを試みます。風景のローカリティを継承するためには、そこに暮らす人々が自らの意志で地域の未来を考えることが必要であり、そのとき地域での合意形成と意志決定のシステムが重要な鍵になると考えるからです。

そこで、第 1 部の基調講演では、地域とは何か、地域自治とは何かについて伊藤洋典氏にご講演いただき、続いてパネルディスカッションで、由布院の風景を題材にしながら、風景はなぜ自ずから崩壊するのか、風景を守ろうとするとき何と戦っているのか等について議論します。

3) 事前説明「由布院に関する基礎知識」要旨

高尾忠志氏（九州大学大学院特任助教）

実際に由布院のまちづくりに関わっておられる九州大学大学院特任助教授の高尾忠志氏が、由布院の基本的な情報からお薦めの店まで、観光 Map を用いながら講演された。

【由布院の概要】

由布院の人口は盆地で約 1 万人である。それに対して、年間の観光客が 380 万人門司港レトロ地区の 100 万人、黒川温泉の約 100 万人と比較すると小規模の温泉地にこれだけの観光客が来るというはある意味で異常とも言える。そのうちに宿泊しているのは 90 万人で他は日帰り、大型バスで乗り合わせて金鱗湖等を見て帰るという人もいる。特徴的なこととして観光客の 70% は女性客で、観光客の 60% がリピーターで 10% は 10 回以上のリピーターで固定ファンがいる状態である。平均客室数は 14 室と旅館としては小さくて、由布院では小規模と好きなお客様に対して丁寧な対応をしている。由布院は値段的に高いというイメージであるが、6000 円から名旅館と呼ばれるところは約 6 万円と幅が大きい。由布院の魅力として田園風景やその観光地を回る辻馬車など魅力あふれるものが多い。JR 九州の観光汽車きっかけとして住民が菜の花を植えたりしてきれいな風景ができている。由布院は温泉の地熱で地面が温かく、朝霧が見える。由布院駅は建築の磯崎新が設計したもので、当初は高さ 20m の西欧のようにしようとしたらしい、が住民の意向で今のデザインに落ち着いた。今となっては由布院のシンボルとなっている。由布院美術館は象設計集団が設計したもので、美術館と言うのは大きな箱モノを一つ作るものであるが、ここは小さな意匠の異なる建築物が 4 つ並んでいて中庭があるような良いデザインになっている。由布院にはデザインされてないようで実はデザインされている空間が多く見られる。由布院にある大分銀行では看板を周囲の景観と馴染むように協議をお願いした結果、根本的な見直しをしてくださって今の看板に落ち着いた。銀行と言う縦割りが難しいような企業が非常に協力的で驚いた。他にもまちづくりのイベントなどについて説明をされた。



【まち歩き】

事前説明の後、第一部開始まで 3 時間程、高尾氏の講演で興味を持った個所に各々調査をした。例えば、大分銀行の建物と調和した看板であったり、辻馬車であったり、中には温泉を満喫したりと各々が有意義な時間を過ごした。

4) 基調講演「『地域』とは何か」要旨

伊藤洋典氏 / 熊本大学法学部教授

【風景と身体性、全体性】

風景というのは、個々の対象に関わるというよりも、それらの全体的なつながりを、身体（五感、感性）を起点として、主題歌した時に現れる。それは客観的世界でもなければ主観的世界でもない。こういった中間的世界に風景は現れる。個々の対象は全体的なつながりの中においてのみ、その固有性を持ち、ものにはそれぞれふさわしい場所がある。石牟礼氏にとって水俣病というのは、全体的なつながりだとか、個々の物に意味を与えるようなものを壊してしまうプロセスが水俣病にはあったのではないのかということを示している。



【抵抗の拠点としての地域】

近代化の過程の中で自分たちの生活世界を拠点を中心として破壊のプロセスに抵抗しようとするといった運動に視野を広げて見ると石牟礼さんの作品以外に多数ある。戦後、民主化を拠点として「地域」社会（多分に農村）への着目は始まったのだが、政治学的に「地域」が登場したのは、九州の「サークル村」運動（上野英信、谷川雁、森崎和江、石牟礼道子ら）や東京での「地域民主主義」（松下圭一）の提唱からである。松下氏の「地域民主主義」が一つの市民運動であったのに対し、サークル村運動は、あくまで土着的な地域に根差した運動であり、中央集権的開発政治への抵抗の起点であった。松下圭一さんの「地域民主主義」は非常におもしろく、60年安保が敗北した時に東京で安保運動がうまくいかない理由は日本の民主化に地域が着いて行けなかったからだと主張した。では何故地域が民主化に対応できなかったかと言うと、地域の村状況が問題だと主張し、村と言うのは市民に成りえない古い社会のことで、近代化されていない社会が残っていることが問題だと考えた。地域主義と言う考えが提議される。住民が風土と文化を含めて経済的自立と政治的自立を果たす、ということで政治・経済・文化というのが一体となったような地域を玉野井氏は定義した。

【自治と言うこと】

自治というもののためにはメンバーシップといったものと単位の団体性といったものが非常に大きな役割を持つ。共通利益と居住空間の一体性というのが元々あって、それが喪失されている。成員資格なしの共同性を考えた時にどういう自治が考えられるだろうかといったことが日ごろの疑問としてある。無境界的、無場所的・社会における自治とは何か。自治を考えるときに自分はそこのメンバーであるといった所属意識がないところで自治と言うものを考えられるだろうか。自治と言うものを考えた時に共有財産としての風景について何かの実践的な活動といったものが、逆に自治的意識を生みだすのでは。

4) パネルディスカッション「地域自治と風景」

コーディネータ：田中尚人氏（熊本大学政策創造研究教育センター准教授）
伊藤洋典氏、小林華弥子（由布市議会議員）、高尾忠志氏

【メンバーシップと場所性の関係】

社会を構成する際に最重要の配偶される財はメンバーシップと言っている。つまり、誰がメンバーであるといったことが社会の在り方を考える時に重要となっている。メンバーシップ形成の時に一つ指標があるのだが、place-場所をベースとして集団を作るか interest-利益、関心を中心として作るかの二つがあり、実際の社会の進み方として place 基盤の方から interest 基盤の方に移り変わってきている例が多いのでは。関心性でつながるメンバーシップで作る自治がある地域の一定の風景とどう関わるかとした時にメンバーシップに入っていない地域の住民の存在をどう認めるのかと言う手続きを整理する必要があると思う。風景を守ることは結果であって、目的ではない。つまり、全ての人に共通の利益があつて活動した結果風景に現れてくる。



【風景を繕うということ】

湯の坪街道で関係性が壊れてしまいそうなものを一つ一つ繋げて行っていることをしている。つまり、ビジョンがあって、それに向けて進めているわけではなく、一つ一つの問題に試行錯誤している。今、目の前にある綻びを結び続けることが風景を繕うということなのかなと思う。

【関心を生むために】

interest を形成するために場所と言うものはすごく大きな要素だと思っている。人間が都市を作るのではなくて、都市が人間をつくる。これは都市には蓄積された文化や伝統があるが、人間にインスピアしていくことを示している。例えばデザインする時も、そこでデザインをするという行為と地域の問題とリンクすると少なくとも由布院では、景観と言うテーマが根付くと思う。

【風景と自治】

行政が景観の条例を作ろうとして、住民と合意形成ができない理由は、やはり景観というテーマで地元に持っていたから失敗している。風景は目的ではなくて結果であるから、いくら条例できれいな道を作つて整備してもそれは本当の風景ではない。景観を守るとか維持していくことの本当の意味、目的を全然説明しないから失敗すると思う。風景とか景観は最終プロジェクトではなくて、解決する問題ではなくて付き合う問題だと思う。これは人間の個々の付き合いや行為の中で生まれてくるものだからである。